



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

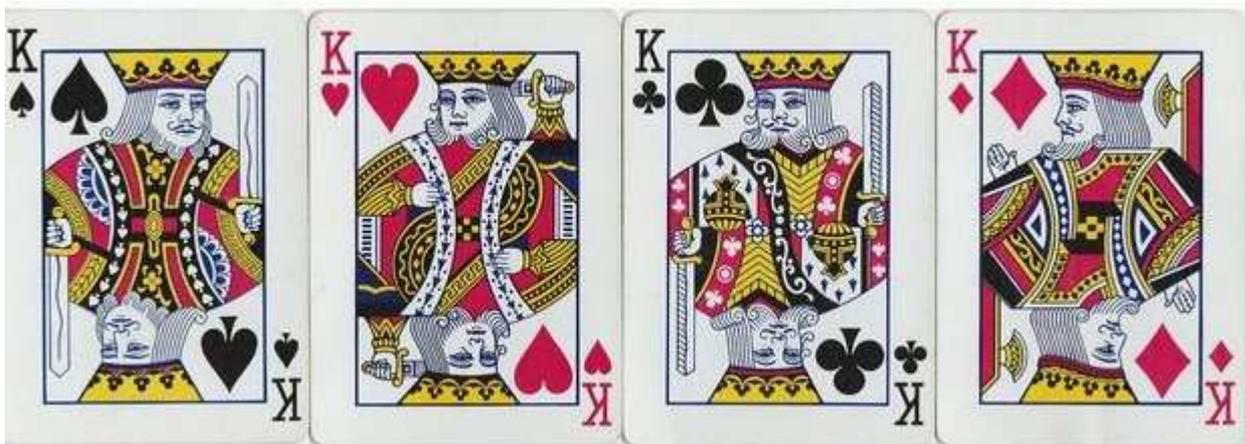
1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員（調査本部長）を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



トランプのキングのモデル

トランプのそれぞれのマークには意味があり、絵札にはモデルがいる。スペードは騎士・貴族を意味し、そのキングはダビデ王（古代イスラエル国王）がモデルである。ハートは僧侶を意味し、キングはカール大帝（中世のフランク国王）、クラブは農民を表しており、そのキングはアレキサンダー大王（古代マケドニア国王）である。ダイヤは商人を意味し、キングはカエサル（古代ローマの軍人、政治家）がモデルとなっており、唯一横向きであるのが特徴となっている。

なお、トランプという呼称は日本だけであり、英語圏では playing cards = プレイングカードと呼ばれている。





成せば成る??

上杉鷹山に「成せば成る 成さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 成さぬなりけり」という有名な言葉がある。

んっ、でもちょっと変。「成せば成る」、成したのなら成っているのは当然。「前提」と「結論」で同じことを言っている。

本来の表記は『為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり』である。「為せば」は、人間の「意志」を持った行動。そして「成る」は結果として得られる状態。願いの成就というものは勝手に訪れてくるものではなく、自らの力で作り上げるものだ、という意味の言葉である。

(追記) 口語に置き換えれば「やればできる。やらなければならない。」(為す≡やる。成る≡できる)

元の木阿弥 (の由来)

戦国時代、大和郡山の城主・筒井順昭が若くして病死、跡継ぎの息子・順慶は2歳と幼少であったため、遺言どおり順昭の死を隠すことになり、替え玉を置いた。死んだ順昭の代わりに姿や声の似た貧乏な僧侶・木阿弥を寢室に寝かせて、順昭がまだ生きているように見せかけたのだ。

息子の順慶が成長をした後、順昭の死を公表したので、木阿弥は用済みとなり、殿様暮らしから、元のしがない僧侶・元の木阿弥に戻ったという。このことから、一度は良い目にあった者が、あるいは物事が元の振り出しに戻ることを「元の木阿弥」というようになったのである。

なお、筒井順慶は「洞ヶ峠」(日和見すること)の語源にもなった武将である。

源頼朝、平清盛の名前の「の」とは?

源頼朝、平清盛、藤原道長、橘諸兄などの場合、姓と名前の間に「の」がつくが、足利尊氏、織田信長以降の人物には「の」がつかないのはどうしてなのだろう。これは源、平、藤原、橘のように「の」がつくのは天皇から与えられた「氏(うじ)」という公式なもので



長期投資仲間通信「インベストライフ」

あって、源頼朝の場合は「天皇から授かった『源』の血筋を引く頼朝」という意味だ。

一方、「の」がつかないものは自分が支配していた領地や地名などからとった日常的に使う「苗字」である。ただ、徳川家康の場合、源氏の流れなので本来であれば「源朝臣（みなもとのあそん）徳川家康」である。しかし、平安末期以降は武士の勢力が強くなり、天皇との主従関係が薄れてきたことから、源氏では「足利」「徳川」、平氏では「北条」「織田」など（氏ではなく）苗字を使うようになったのである。

御料車とトヨタ・センチュリーロイヤル

戦後の御料車はキャデラックが使用されていたが（戦前はロールス・ロイス、メルセデス・ベンツ）、昭和42年（1967年）からは初めて国産の日産・プリンスロイヤルが導入された。しかし、経年劣化が進み、製造元の日産自動車が用途廃止を願い入れたことから、平成18年（2006年）からはトヨタ・センチュリーロイヤルが御料車として使用されている。一部富裕層等から一般販売を希望する声もあるが、センチュリーロイヤルは御料車専用車種であるため、一般への販売は行われていない。

なお、センチュリー（CENTURY）の名称は、初代モデルが発表された昭和42年（1967年）がトヨタ創業者・豊田佐吉の生誕100年であることに由来している。

・写真はセンチュリーロイヤル（Wikipedia より）





紅一点 (の「紅」とは?)

中国・北宋時代の政治家・詩人である王安石の詩「詠柘榴」の中に「万緑叢中紅一点 (ばんりよくそうちゅうこういってん)」の句がある。万緑は一面の緑、叢中は草むらの中、紅一点は紅色の一輪の花 (ざくろ) の意味である。

ここから多くのものの中で、ただひとつ異彩を放つもの、転じて多くの男性の中に混じっている、ただ一人の女性のことを「紅一点」というようになったのである。